

「甲子園から全国へ・・・2013 春」

第 85 回記念選抜高等学校野球大会を終えて

記念大会として、開幕前から注目を浴びた今大会。
大会日程も順調に消化され、テンポ良くキビキビとした試合運びが展開されました。
選手・指導者・審判委員による総力を挙げた 35 試合でした。
大会を通じての特徴的な課題を振り返ってみましょう。

① 守備をする選手に対する妨害は絶対許されません。(規則 2.44(a))

高校野球では永年に亘って「フェアプレイの精神とマナーの向上」を幾度となく啓発してきた経緯があります。

2000 年には「本塁上でのオブストラクションの厳格適用」として、特別規則を設け、徹底指導を図っていただいたおかげで、昨今では危険なプレイの一部から大きく改善がなされています。

その一方、今大会ではボールを保持している野手に走者が守備させまいと妨害するケースが目立ち、中にはその守備妨害適用によって、ゲームセットとなった試合が 2 回発生しました。極めて後味の悪い結末が全国に発信されたのです。高校野球は教育の一環として取り組む。その姿勢は『日本学生野球憲章』に定義付けられています。

すなわち野球を通じて礼を重んじ、相手を敬う心を磨き、そして自らの成長を期することが要求されています。選手だけでなく、指導する立場の関係者にも大きな責任が課せられていることを重く受け止めるべきだと思います。

今一度、フェアプレイの原点である「respect」と「justice」を高校野球関係者全員が、強く認識を深め、教育の一環としての高校野球を推進していくことが責務と考えます。

規則を破ったからペナルティを与える・・・これは教育では無いと考えます。規則を守るように指導することが肝要ではないでしょうか。危険なプレイの絶滅を目指しましょう。

② 大会前半、反則投球が多発しました。(8.01(a)、(b)の投球動作に違反しての投球)

投手はシーズンオフ時には、フォームの改造を図ることが多く、春先の選抜大会では、実戦経験も少ない中での登板となる事も事実でしょう。

今大会では 8 日目時点で 7 人もの投手が反則投球に抵触する投球が見受けられ、審判委員がその都度、投手に対してペナルティの適用、もしくは、注意を促すと、次の投球からは正規の投球動作に改善されています。意図的な解釈とは申しませんが、走者有りの場合は不正の傾向が見当たらないことから、打者を惑わす為に工夫していると思われるも仕方が無いのではないのでしょうか。練習試合を通じて、日頃から正しい投球への指導を根気よく心掛けていきたいものです。

最後になりますが、近年は全国的にテンポの良い試合運びが展開されております。引続き 9 イニングの時間配分と審判委員の正確な判定への探求を心掛けていただき、夏の選手権地方大会に臨んでいただきます様よろしく願い申し上げます。